

母親の1歳児に対する好ましい語りかけのあり方を探る

—家庭での観察調査から—

幼児教育選修 林 佳那

I. 研究目的

本研究のきっかけとなったのは、本研究協力者の第1子の姿であった。2歳11か月の第1子は、一般的な発達状況と比べ言葉の獲得が遅く見られた。0～1歳の時期から母親が意識的に語りかけをすることが望ましいが、理想と現実には差が生まれることが予想される。そこで1歳1か月の第2子に対して母親がどれほどの、そしてどのような語りかけを行っているのか、また子どもへの「語りかけ」について母親自身がどのような意識をもっているのかを把握することで、より好ましい語りかけのあり方について検討したい。

II. 「言葉」の獲得・発達過程

「理解語彙」と「表出語彙」の獲得にはおよそ半年の差があると考えられている。つまり私達人間は、聞くこと・話すことの興味は同じスタートラインだったにもかかわらず、「理解語彙」が「表出語彙」よりも先に発達を迎えるのだ。よって、まだ「表出語彙」の発達が未熟な時期からの母親の語りかけが、「言葉の獲得」にとって必要不可欠であると考えられる。

III. 研究方法

1) 調査対象者・実施時期

家庭で養育される女兒（1歳1か月児）および主たる母親1組。実施時期は2014年8月2日（土）。

2) 調査方法

女兒が起きている状態の時を常にビデオカメラを用いて観察した。ただし、撮影協力者である母親のプライバシーに配慮して、「撮影を行っても支障がない状況」に限り、撮影するように依頼をした。よって入浴の時間や外出先での撮影困難な状況の撮影は行わない。撮影は筆者がビデオカメラを手で持った状態か、箱の上などのやや高い位置に固定した状態で行う。

3) 観察の視点

以下の14の「言葉の獲得にとって好ましい母親の語りかけ」のポイントを観察の視点とする。

- ①シンプル・簡潔
- ②ゆっくり・はっきり
- ③肯定的・ポジティブ
- ④抑揚が大きい

- ⑤少し高めの声
- ⑥子ども向けの感情豊かな表情
- ⑦正しい発音
- ⑧ジェスチャー・指さしを意図的に使う
- ⑨子どもの気持ち・行動を母親が代わりに言う
- ⑩子どもが母親よりも先に話す
- ⑪テレビを見せるときは母親も一緒に歌ったり、子どもの問いかけに答える
- ⑫母親の口の形が見える
- ⑬子どもの声・動きをまねる
- ⑭母親が自分の気持ち・行動を口に出す

IV. 結果と考察

対象児の主な生活の時間割合は以下のようになった。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・自由遊び時間：26%（約6時間14分）・睡眠時間（昼寝・絵本の読み聞かせ～就寝）：51%（約12時間14分）・食事時間：14%（約3時間21分）・歯磨き：1%（約14分）・その他：8%（約1時間55分） |
|--|

生活の場面を細かく分けた結果、計25場面となった。

以下の表1において、全体を通して対象児に対する母親の語りかけの中で多く見られた要素数を示す。表1の結果から、対象児に対する母親の語りかけ全体の中で最も多い要素となったものは「①シンプル」であった。つまり母親は子どもに対する語りかけの中で無意識的に分かりやすい言葉や簡単な言葉で語りかけていることが読み取れる。

また、本研究ではマザリーズの要素である、1. ゆっくり・はっきりと 2. 抑揚の大きな 3. 少し高めの声の3つの要素に分けて考えた。その結果、母親の語りかけの中で多かった要素の順番は「⑤少し高めの声（389）」、「②ゆっくり・はっきり（344）」、「④抑揚が大きい（173）」という結果となった。全体の中で見ても「⑤少し高めの声」と「②ゆっくり・はっきり」は3位、4位と上位であったが一方、「④抑揚が大きい」は全体の中でも7位であり、量からみても「⑤少し高めの声」の半分以下という結果となった。よって本研究の対象者であった母親の中にマ

ザリーズとなる要素はあるものの、全ての要素が揃っていることは少ないことが分かった。

表1：対象児に対する母親の語りかけの要素数

順位	要素	量
1	①シンプル・簡潔	540
2	⑦正しい発音	530
3	⑤少し高めの声	389
4	②ゆっくり・はっきり	344
5	⑨子どもの気持ち・行動を母親が代わりに言う	248
6	⑧ジェスチャー・指さしを意図的に使う	230
7	④抑揚が大きい	173
8	⑥子ども向けの感情豊かな表情	163
9	⑩子どもが母親よりも先に話す	160
10	⑫母親の口の形が見える	151
11	⑭母親が自分の気持ち・行動を口に出す	62
12	⑬子どもの声・動きをまねる	54
13	③肯定的・ポジティブ	31
14	⑪テレビを見せるときは母親も一緒に歌ったり、子どもの問いかけに答える	0

さらに、「⑦正しい発音」が全体の中で2位という結果となったが、対称的な要素である「⑬子どもの声・動きをまねる」が12位という結果となった。量を比較しても両者の間には約10倍もの差が見られたことから、本研究の対象者であった母親は子どもの声をまねるなどのいわゆる「赤ちゃん言葉」よりも「正しい発音」を多く発していることが分かった。

また、「⑥子ども向けの感情豊かな表情」と「⑫母親の口の形が見える」は量から見ると(163)、(151)とほぼ等しい割合で母親の語りかけの中に見られた。一方で生活の場面ごとに両者を見てみると、生活の場面25場面中4場面で一方の要素が0になるという結果が出ていた。つまり、全体の結果で見ると両者は同じ割合で母親の語りかけの中に見られていたが、どの場面でも両者が同時に同じ割合で発せられているわけではなかった。いくら母親が感情豊かな表情をしていても子どもがその表情を見ていなければ本来の効果は発せられない。この両者が密接に関わっていることが大前提であると言えるので、この両者を同時に発することを意識的に行うことが子どもの「言葉の獲得」に繋がっていくと言える。

以下より、筆者が特に気になった部分について(1)

～(3)に分けて考察を行っていく。そして最後に母親へのインタビュー結果を(4)にて記載する。

(1) 肯定的・否定的な語りかけ

「⑪テレビ～」が最も全体の中で低いという結果となったが、テレビ視聴をしている場面は今回のビデオ観察の中でごくわずかな時間であった。また、「③肯定的～」と「⑭母親が自分の気持ち・行動を口に出す」は共通している点がいくつか見られることが予想されるが、両者ともに全体の中で13位、11位と下位に位置していた。よって実質的に「③肯定的～」が最も母親の好ましい語りかけとして不足していると考えられる。

そしてむしろ否定的な語りかけをしていることの方が多いたことが分かった。以下が生活全体の中で見られた肯定的な語りかけと否定的な語りかけの主な分類である。

表2. 肯定的な語りかけ

肯定的な語りかけ	例)
1. 子どもを認める語りかけ	「はい、よくできました。」
2. 感謝を述べる語りかけ	「ありがとう」

表3. 否定的な語りかけ

否定的な語りかけ	例)
1. 否定的な副詞の伴う語りかけ	「 <u>もう</u> 起きちゃうの？」
2. 否定的な名詞の伴う語りかけ	「Hちゃん、中入るとね、お姉ちゃんの邪魔になるでね、こっちにいな。」
3. やわらかい、否定的なお願いをする語りかけ	「やめてー。」
4. 母親の否定的な気持ちを言う語りかけ	「ぱくってしちゃ嫌。」
5. 強い注意・命令をする語りかけ	「くわえたらだめ、めだよ、め。」
6. 他者との比較をする語りかけ	「でもこういう上ることはしなかったんだけどお姉ちゃん。」

しかし、環境の再構成次第で否定的な語りかけを減らすことができる可能性が高いと考えられる。

また、「ダメ」の意味、そして何故「ダメ」なのか分かる時期を母親がしっかり見定めながら、語りかけや家庭環境の構成を行っていくことが、子どもの「言葉の獲得」にとって大切なことであると考え

られる。

(2) 自由遊びにおける母親とのかかわり

1日の26%という大部分を占めている自由遊びの時間にどのような母親の語りかけが好ましいかについての理解を深めることができれば、より対象児に対する母親の好ましい語りかけの頻度が多くなることが予想される。そこで自由遊びの時間をさらに以下のa)~c)の3つの時間に分類して考えることにした。(図1)以下、その考察結果を(イ)~(ハ)において示す。

- a) 黙々と1人で遊んでいる時間
- b) 母親と遊んでいる時間
- c) (母親以外の)大人と遊んでいる時間

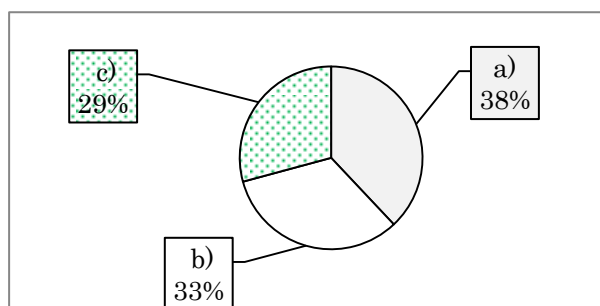


図1. 自由遊びの主な時間の割合

(イ) a・cにおける時間的比較

a) 子どもの1人遊びの集中時間は平均2分17秒であった。次に母親を求めやすい時間を求めた結果、a)1人遊びの時に子どもは母親を平均2分17秒、割合としては0~30秒の間隔で母親を求めることが多かった。

一方、c)大人と遊んでいる時には母親を平均3分3秒、割合としては31秒~1分の間隔で母親を求めることが多かった。また、最高継続時間もa)1人遊びの時は6分46秒であったのに対し、c)大人との遊びの時は13分12秒であった。つまり、子どもは1人よりも大人との遊びの方がより集中して遊びこむことができると考えられる。

(ロ) a・cが終了したきっかけについての比較

母親を求めるきっかけとしては、主に以下の10点であった。

表4より、子どもは「寂しい」「悲しい」などのようなネガティブな感情を母親に埋めてほしいという思いから母親を求めることが多いことが分かった。特にa)1人で遊んでいる時は母親に甘えたくなったり、なんとなくぐずりやすくなったりすることが多い。つまり、子どもは母親とのスキンシップの伴っ

た遊びを非常に好んでいることが分かる。

表4. 対象児が母親を求めたきっかけ

母親を求めたきっかけ	a 順位 (割合)	c 順位 (割合)
1. 寂しい気持ちになったから。	1位(46%)	1位(53%)
2. 悲しい気持ちになったから。	2位(20%)	2位(13%)
3. 自分にはできないことを母親にやってほしかったから。	3位(15%)	4位(7%)
4. 自分でもできるが、母親にやってほしいことがあったから。(甘え)	4位(5%)	7位(0%)
5. 一緒に遊びたいという気持ちになったから。	4位(5%)	7位(0%)
6. 生理的欲求から。	6位(3%)	2位(13%)
7. 自分のことを見てほしいという気持ちになったから。	7位(2%)	7位(0%)
8. 羨ましい気持ちになったから。	7位(2%)	4位(7%)
9. もやもやとした気持ちになったから。	7位(2%)	7位(0%)
10. 不安な気持ちになったから。	10位(0%)	4位(7%)

さらに、子どもはc)大人との遊びの時には時折「人見知り」から母親を求めることがあった。より多くのかかわりを通して子どもも少しずつ安心感が生まれてくると考えられるので、その段階が来るまでは十分に母親に甘えさせてもらうことが1歳1か月の時期には必要なことのように思う。

(ハ) bが終了したきっかけについて

b)母親との遊びを終了するきっかけは主に「1)子どもが興味のあるものの方向へ行こうとしたから」と「2)母親の用事ができたから」の2点であった。その中でも子ども発信である1)の平均的な時間は約2分8秒、最も多い割合は31秒~1分という短い時間であったことから、母親とのほんのわずかなかわりは子どもに安心感を与え、遊びに気持ち良く戻ることができる手助けになると考えられる。

「母親と遊びたい」「1人で探検してみたい」など、その時々で子どもの思いは変化していく。母親が子

どもの1人遊びの際にむやみにたくさん語りかけることが良いというわけではなく、子どもの求めている思いにどれだけ気付くことができるかという点が語りかけにとって最も重要なことのように考えられる。

(3) テレビ

テレビの長時間のつけっぱなしがビデオ観察の中で目立っていた。このようなつけっぱなしは大人が思っている以上に子どもにとって母親の声を聞く邪魔になってしまう。これが言葉や心の発達の妨げに影響を及ぼす可能性がある。2歳までテレビを見せないことは現実には難しく、親を追い詰める可能性もあるので、バランスを調整しながら子どもの成長にとって効果的なテレビの面を上手く活用していくことが大切であるように考えられる。1つの例として、長野県池田町の3つの公立保育園では、2002年から毎月第3日曜日を「ノーテレビデー」にし、家庭でテレビを見る時間を見直し、親と遊ぶ時間にするという取り組みを始めている。親子が遊び方を学ぶと、結果的にテレビをつけなくても良くなるという正の連鎖が生まれる。

(4) 母親へのインタビュー

子どもへの語りかけに関して母親側の見解を知りたいと考え、ビデオ撮影終了後に母親へいくつか質問を行った結果、母親自身が今の1歳の次女に言葉をかける時に意識していることは、(次女が言葉をまねることが好きであるため) ゆっくり何回も言うようにすることであった。

また、大人と子どもで話し方に違いは特になく、むしろ赤ちゃん言葉はあまり使わないよう意識をしていた。

さらに、叱ったりする時や褒めたりする時など、何かを伝える時には目を合わせて言うようにしているが、目を合わせようとしていても、子どもが合わせてくれるとは限らないので難しいという思いを話してくれた。

V. まとめ

(1)～(3)の研究結果と(4)の母親へのインタビューから得た思いを比較し、本研究の課題であったより多くの母親が子どもに対して言葉の獲得を目的とした語りかけをたくさん行うあり方として考えられる以下の5点を提案していきたい。

- ① 好ましい語りかけのポイントを母親が意識する。
- ② 「言葉を教える」という考えではなく、「会話を楽

しみながら言葉を獲得していく」という考えを母親がもつ。

- ③ 「赤ちゃん言葉」の利点についての理解を深める。
- ④ 子どもへの語りかけのどの場面においても子どもと目を合わせる意識を母親がする。
- ⑤ 子どもが不快な思いを感じている時にきまってよく行うしぐさに母親が気付く。

また、筆者が思うに、母親が大切にすべき意識は“母親が子どもと楽しい時間を過ごす”という意識であるように思う。

今後の課題となる点としては、母親が子どもの思いにどれだけ応えることができているのかを分析すること、言葉の獲得を目的とした母親の好ましい語りかけの多くを学ぶべきであるということ、様々な環境で母親の語りかけを調査していくことなどが挙げられる。

本研究は一事例であったので、この結果をそのまま一般化することは難しいかもしれないが、本研究の調査対象者のような一般的な家庭の母親(専業主婦)と1歳児の子どもに対して、一定の目安を提供したのではないかと考える。

忙しい日々の中でなかなか全ての好ましい語りかけを行うのは難しいことかもしれない。その子どもによってその語りかけが適している、適していないなどもあるだろう。しかし母親の少しの意識が子どもにも「言葉の獲得」以上のポジティブな影響を与える可能性があるということを理解しておくことで、子どもだけでなく母親自身も育児に対して前向きな気持ちになることができるのではないだろうか。

参考文献

- ・朝日新聞朝刊記事 (2004.2.20) 『テレビに頼らぬ育児って』
- ・小嶋 祥三/鹿取 廣人 (1999) 『ことばの獲得(ことばと心の発達)』 164-173 ミネルヴァ書房
- ・サリー ウォード /訳: 榎 朝子 (2001) 『0～4歳 わが子の発達に合わせた1日30分間「語りかけ」育児』 小学館
- ・中川 信子 (2014) 『0～4歳 ことばと心を豊かに育てる 子どもの発達に合わせたお母さんの語りかけ』 株式会社 PHP エディターズ・グループ
- ・山本 千紗子 (2009) 乳幼児に話しかけること・褒めることの大切さ: 子育て支援のためのエビデンスを求めて 上武大学看護学部紀要 5(1)